修士論文概要

青年期における自我同一性及び Jung の心理学的タイプと樹木画との関連の検討 —幹先端処理に注目して—

小野　薫

1. 問題と目的

鶴田(2005)は、二本線で構成された幹の先端をどう描くか、どう処理するかという「幹先端処理」の視点をバウムのへそのようなものと指摘し、弁証法的な運動があるする。藤岡・吉川(1971)が指摘しているように、解析的にバウムの部分的な特徴によって仕分けしていく方法では「バウムの全体の印象はバラケルばかり」で、そこに弁証法的な運動は生じていない。高橋ら（2010）が指摘するように樹木画テストの解釈仮説は Jung 心理学を基本とすれば、このバラケタ指標による解釈は本来のものではなく、バウムの描出の弁証的な運動を如何に見て取るかが問われる。本論では「幹先端処理」に着目した。

Jung 心理学では、弁証法的な運動による心理的な成長の方向性を個性化の過程とする。個性化の達成が、Jung が太陽の運行を比喩としたライフサイクル論によると、太陽が南中を越えて西の地平に沈むように、人が死に向かう段階に入って実現するという。バウムテストが Jung 心理学に基づくとすれば、このライフサイクル論に基づいた指標の意味の探索が必要と考えた。本論はその探索の試みの一つとして、南中を越えて個性化を迎える遥か前の青年期に着目している。

Jung は人の心を、Freud が、ごつごつした氷山の喩えとは異なり、綺麗な球体に喩えた。人の心はその球体のようなイメージの曼荼羅に向かうこと、精神疾患者への臨床体験や宗教、伝説、世界各地に残る古代の作品など人類学的知識から導いている。その個々人がもつ曼荼羅上の中心のセルフが至るには、ただ時を経れば至ることができるものではない。弁証法的な運動とする様々な対立する葛藤状態からのアクティブ・イマジネーションの過程を経てそのセルフの位置に至ることができる。南中を迎える青年期にアクティブ・イマジネーションに相当する体験がなければ、太陽の運行の軌跡を体感することはできない。個性化の過程は、Freud が病理や成長を心的構造論から一般化したこととは異なる。太陽の運行の軌跡を体感し集合的無意識との対話が生じている青年期ならではの弁証法的な運動が、成長から個性的な姿となる樹木のイメージとしてどのような特徴で現れるのか、そこに個性化に向かう青年期ならではのバウムの指標の意味を方向づけていると考える。

Jung と同様に人は一生涯発達し続けるとしたのは、Erikson で、青年期の課題はアイデンティティの確立としている。Erikson は Jung が袂を分かつことになった Freud 派である。アイデンティティという体験は、青年期ならではの体験で、その後の段階に進む土台となる体験である。また Erikson は発達課題という弁証法的な構造を発達理論に有している。Jung が指摘する太陽の運行の軌跡を体感すべくアクティブ・イマジネーションに相当する体験の指標となっているものと考える。

Jung の理論にタイプ論がある。外向－内向、思考－感情、直観－感覚等の対構造で、弁証法的な運動を想定している。青年期には、Erikson の青年期のアイデンティティをめぐる作業の中で、Jung が想定したタイプ論からの心の動きとの関係を指標として用いる。

本論ではバウムテストの幹先端処理に着目し、Jung の発達理論の中で、個性化に向かう途中段階の青年期における幹先端処理の描出から心的な過程を検討することを目的とする。

2. 方法

私立大学の学生 80 名に対して調査を行った。欠損値のある 4 名を除外し、76 名（男性 33 名、女性 43 名、平均年齢 20.6 才）を分析の対象とした。調査日は、2016 年 7 月

7 日と 8 日であった。大学の講義の一コマ 90 分の後半 45 分程度を費やし、集団法、速度強制法で調査した。実施内容は、描画法であるバウムテスト及び以下の質問紙による。

①フェイスシート;調査対象者に関する基本的な属性（所属学科、学年、年齢、性別）

②バウムテスト；A4 版ケント紙を調査対象者の前に縦向きに置き、「１本の木を描いて下さい。」と教示し樹木画を描くことを求めた。4B 鉛筆を使用し、描画時間は 20 分間。

③多次元自我同一性尺度（MEIS）（谷,2001）；多次元から同一性の感覚を測定する自我同一性尺度で、「自己斉一性・連続性」、「対自的同一性」、「対他的同一性」、「心理社会的同一性」の下位尺度で構成されている。

④Jung の心理学的タイプ測定尺度（JPTS）（佐藤，2005）：Jung の概念を反映した心理学的タイプの測定尺度で、「外向—内向」、「思考—感情」及び「感覚—直感」の 3 つの下位尺度で構成されている。

3. 結果と考察

Jung 心理学はアクティブ・イマジネーションを理論背景として弁証法的な運動を中心とした方向性を有している。本論ではバウムテストにおける弁証法的な運動の所在としての「幹先端処理」を取り上げ、「分化」「包冠」の２分類（奥田、2005）に着目した。多次元自我同一性（谷、2002）の４つの下位尺度得点を従属変数とし、描画の４分類とタイプ論を独立変数とする被験者間分散分析により分析を行った。その結果を以下に示す。

①バウムの描出に対して分化と包冠とした分類、それぞれの描出の中で単に枝分かれ、一筆書き的包冠に止まらず、その先の描出に向かうのかに着目し、分化群と包冠群と共に、「幹先端処理」の先に描出を進める分化Ｆ群と包冠Ｆ群を設定したこと

②分散分析の交互作用として、分化Ｆ群－感情タイプ、包冠Ｆ群－感覚タイプで自我同一性が高くなっていること

以上の①②から、自我同一性の状態に対して「幹先端処理」の弁証法的な運動だけでなく、その後に樹冠でどう展開するかといった描出過程でも弁証法的な運動があることで、自我同一性の尺度得点の高さが異なることを見出した。さらに以下の点も見出された。

③Jung のタイプ論の感情及び感覚タイプとの相互作用が認められ、自我同一性に対して、タイプ論による優勢機能の関わりが見られた

④タイプ論の外向タイプによる主効果が自我同一性の３つの因子に関わっていること

これら③④から、山中（1996）によるボールの凸凹を彷彿させる Jung 心理学の弁証法的な運動として、太陽の軌道における中年期である南中を向かえる前に、明るく、力強く、まぶしい活発な青年期の姿がバウムテストに反映されていることを明らかにしえた。

青年期では枝の分化の如く、感情を伴い外界に積極的に関心を持ち、働きかけることで自己実現を目指していることを指摘している。自己実現としての個性化は、中年期以降で実現に向かう。青年期では、バランスの歪みがあるゆえに、中年期以降で、それまでに生きてこなかったタイプとの弁証法的な運動を通して完成に向かう Jung の発達論による個性化の過程を実証的に示した。

5. 引用文献

山中康裕(1996)「臨床ユング心理学入門」、ＰＨＰ研究所

奥田亮（2005） 山中康裕、皆藤章、角野善宏[編]、バウムの心理臨床、創元社

佐藤淳一(2005) Jung の心理学的タイプ測定尺度(JPTS)の作成、心理学研究 76(3)、日本心理学会

谷冬彦（2008） 自我同一性の人格発達心理学、ナカニシヤ出版